# 濡れるのは裏側の瞼

著／恵久地 健一

『少女』アメデオ・モディリアーニ（1884-1920）〝ALICE〟

PD-Yorck Project (C) 1915 Modigliani,Amedeo/sourec WikimediaCommns

1.

わたしの人生は闇の中でした――

こうして闇と表現するのは、いわゆる不幸であるとか、絶望的であるとか、そうした場合なのでしょうけど。べつにそのような意味ではありません。

ただ両目が、なにも見えないのです。先天性の視覚障害だと両親やお医者さまから教えていただきました。

生まれつき――ママの中にいたときからかもしれませんが――わたしの目には障害があり、名前をいただいた数ヶ月後には、完全に視力をなくしました。ですから、わたし赤誠メリイは光や色とは縁のない生活をしております。

赤誠というのが、わたしのファミリーネームです。赤道のセキに、誠実のセイで、セキセイです。ファーストネームはメリイ。この体に次いで、両親から二番目に贈られたものです。

盲目という不具合のある体にできた娘にもかかわらず、両親は本当にたくさんのものをあたえてくださいました。

けれど、わたしが両親によくしていただいたと書いても、やはり目の見える方には不遇のように映るものでしょうね。文章化されたはずのこれをお読みなら、あなたは目がお見えなのでしょう？

もしあなたの視力が消えて、まっ暗で上下も左右もない闇だけの世界しか見えなくなれば、それは恐ろしく思われるでしょう。けれど、わたしにはそれが通常なのです。物心がつく前から闇に満ちた世界で生活をしているわたしは、光が照らす世界を知りません。ですから、光を失う恐怖のないわたしが自分を不幸に思うこともないのです。

それに、わたしは言葉を話すことができます。点字であれば言葉も読めます。簡単な文字や絵を書くこともできます。あなたは目がお見えでしょうけど、いくらこの文章を目にしても、わたしの姿まで見えるわけではないでしょう？

わたしの髪がどれだけ長いとか、肌がどれだけ白いとか。そうした情報をわたしが点字タイプ式ライタで入力して、入出力マイク対応の汎用機で通常言語にアウトプットしなければ、あなたにはわたしの姿が見えないはずです。

つまりこうして文章を通じれば、目の見えないわたしでも、目の見えるあなたと対等になれるのです。これもパパやママに文字と言葉を教えていただいたおかげですし、色々な機械をあたえていただいたおかげです。

ああ……すいません。読み返すと、ずいぶん偉そうなことを書いていますね。

わたしの文章に変なところはありませんか？　文字や単語は正確に変換されていますか？　あなたを不快な気持ちにさせていないでしょうか。

もし都合がよろしければ、またわたしの話を読んでいただけませんか？

わたしが自分の生活を文章にすることをはじめたのは、メンタル的な治療の意味もありますけど。自分の書いた文章を誰かに読んでいただけることは、わたしの希望でもあるのです。本当に都合がよければで、よろしいですから……

＊

目の見えないわたしでも、目の見える方と同様に、文字を理解して言葉を話せることは前に少し書きましたけど。

それでも、やはり目が見えないぶん通常よりも時間をついやしたように思います。ただわたしは、学校というものを利用したことがありませんので、通常の勉強をあまり知らないのですけど。

生まれて最初の勉強は、パパやママの言葉をくり返すことでした。わたしの手をつかんで「ほら、パパだよ」と耳に聞こえる太い声から、わたしも「パパ、パパ」と呼び名をくり返し、わたしに温かさを伝える大きな手の持ち主が、パパであることを知りました。

ものの形を理解するときも、色々な形の積み木から球や四角の形を覚えたり、動物の模型から鳥やウサギや、犬や魚の形を覚えたり。パパの手や声を覚えたとき、温かさや音を伝えた空気、積み木や模型、形のあるもの、形のないもの。両親の声と手や肌にふれた感触。そのふたつの疑いなきものから、わたしはこの世界の色々な存在を知りました。

食事のときには、口の感触と舌の刺激が学習の手段でした。ママが手をそえた円筒形のコップで水を飲むとき、さらさらとノドを流れる冷たい液体が、水。ミルクを飲むときも、口の中に流れる感触が水よりも重く、濃厚な味や匂いを舌と鼻に感じさせる液体が、ミルク。

こうした小さい頃の勉強は、目の見える方でも似たようなものでしょうけど。

わたしは目が使えなくても、それ以外の感覚をすべて活用することで、たくさんのものごとを学んだのです。

感覚の勉強が進むと、次に教えられたのは文字を理解することでした。

「メリイ、人さし指を出してごらん」

パパはそう云うと、わたしの人さし指を自分の指でつかみ、あ、い、う、え、お、と紙に書かれた文字の上をなぞるように、わたしの指を動かしたのです。

わたしは指先の動きに合わせ、闇の中に浮かび上がる文字の形を光の線として想像しました。盲目のわたしにも、光の記憶はあるのです。それは生まれたばかりの頃、弱まる視力でかろうじてとらえていた、かがやきです。

人間は記憶力の限界で過去を忘れたとしても、記憶そのものは消えないそうですね。わたしが思い出せるのは、闇に塗りつぶされた日常だけですけど。目を閉じて深くふかく意識を集中すると、瞼の裏側に見える光があるのです。

文字と同時に教えられたのが、世界の仕組みについてでした。学校で云えば、いわゆる国語と社会科でしょうか。

わたしたち人間が、みな地下のシェルターで暮らしていること。わたしたちの両親の親のそのまた親の代に、全世界を巻き込む大きな戦争が起きて、地上の全土が破壊しつくされたこと。生きものがたくさん死に、人間全体の数も過去に比べて今は十分の一以下であること。

小さい頃のわたしには世界の破壊という意味がうまく理解できず、そのことを教えてくださったママにたずねました。

「壊れるというのはね、メリイ。もとの形へ戻すのが駄目になることで、おなじように使えなくなることよ」

「じゃあ、もとには戻せないの？」

「昔の人間が住んでいた場所は、もう戻せないわね。でもメリイ。たとえ壊れても、世界はなくならないのよ」

そう云うと、ママはわたしの頭をやさしく撫でました。その数日後、わたしは両親に連れられ、地上の世界が本当に存在することを自分の足で確かめることになるのでした。

＊

わたしが両親に連れられ、はじめて地上の世界に出たのは十歳の頃でした。

その日わたしは、まずママに服を脱がされ、裸で立たされました。そして、背中や胸やおしりの上まで、冷たくぬるりとした保護クリームを塗られたのです。地上では空からふりそそぐ光線や空気の中に微量な有害物質がふくまれるため、体の弱い子供は、そうした予防策が必要なのだと教えられました。

頭には大きな帽子をかぶり、全身を包むワンピースを着て。パパの運転する電動カートでシェルターの通路を抜け、ママとパパに両手を引かれ、わたしは地上への階段を歩きました。

わたしは目が見えませんから、景色の変化は分かりませんでしたけど。それでも地上へ出たときには、はっきりとそれが分かりました。

別世界の空気、ひやりと冷たい。地下では感じることのない風が、びゅぅと音を立て吹いていました。わたしは地上の世界をさらに感じようと、指を開いた両手を前にさし出しました。辺りを探るように動かしても、さわれるものはなく、しっとりと重みのある風だけが手の表面を撫でました。

それと、風が運ぶ匂い。埃くさいような、湿気くさいような。腐臭と云えば表現が悪いですけれど、野菜や肉が古くなるとくさい匂いが増すのとおなじで。地上の空気をくさいと感じたのは、おそらく堆積した時間の匂い。

目の見える子供なら、学校の時間に過去の都市や緑の木々が生えた世界の映像を見せられるでしょうから。荒涼とした地上にショックを受けるのでしょう。け

れど、現実の世界しか感じることのできないわたしは広大な空間とそこから受ける刺激に心が震えるだけでした。

「どうだい、メリイ。地上の世界は、今ちょうど夜だよ」

パパはそう云うと、わたしに周囲の景色を説明してくださいました。

なにもない地面がどこまでも広がり、遠くには黒い影のような三角の山。雲ひとつなく晴れた黒い空には、満天の星とほそく痩せた三日月。わたしは顔を上げて片手で帽子をおさえ、闇しか見ることのできない目を夜空に向けました。

「星と三日月……」

無数の輝点が闇に浮ぶイメージ。闇に侵食され、かがやく、弓なりの円弧。

「ああ、どちらもぴかぴかと白く光って綺麗なもんだ。ただ星のほうは、よく見るとみんな微妙に色が違うんだ」

パパの言葉を聞きながら、目を閉じて意識を集中した瞼の裏側が、冷たくなるのを感じました。ふたつの目からこぼれた水が、すじとなり頬を伝いました。涙でした。わたしは目もとをぬぐうこともなく、とめどなく涙を流したまま、顔を夜空に向けていました。

綺麗な景色を見られないことが悲しいと云えばそうでしょう。地上へ出られたことに感動したと云えば、たぶんそうでしょう。けれど、そのときのわたしは涙が流れる理由も分からず、ひそやかな祈りのように声もなく泣いていました。

＊

はじめて地上の世界にふれた後も、年に何度か両親と一緒に、時間と場所を変えて地上に連れ出されました。それは学校で云う、遠足や課外授業のようなものでした。そしておなじ頃、もうひとつ世界を広げる存在として地下ネットワークのことを教えられました。

管理局から配布されたネット端末は、わたしの家にも一台ありました。地上やネットワークの存在は学校へ入学する頃には誰でも教えられるそうですけど。やはりわたしは、通常より少し遅れていたでしょうか。

ＩＤを持たない子供でも両親に頼めばネットワークを利用することができるわけですし。ＩＤや年齢の認証を必要としないニュース番組や、教育番組もありますからね。けれど、存在を教えられたのが少し遅かったのと、やはり目が見えないせいもあって、わたしはネットワークをあまり利用しませんでした。

パパとママは「見たいものがあれば云いなさい」とネットワーク用のモニタも部屋に置いてくださいましたけど。映像が見えなくても、聴いて楽しめる音楽番組もありますからね。わたしを退屈させないためと勉強のためだと思います。けれどわたしはその頃から読書に夢中で、楽しみと勉強はそれで充分でしたから。

特に小説。いいですよね。映像や音楽と違い、読書は自分のペースで物語を想像して楽しむことができますし。わたしの場合はネットワーク内でデータ化された文章を点字にアウトプットして、それを本として読むわけですけど。

わたしがネットワークの恩恵を一番に受けられたのは、著作権の切れた小説をデータとして引き出せたことです。それこそ過去の作品なら、世界中の小説がいくらでも無料で読めますからね。

特に、古いファンタジー作品が大好きで。お気に入りは、ロード・ダンセイニ『魔法使いの弟子』。ジョージ・マクドナルド『リリス』。ルイス・キャロル『不思議の国のアリス』。最近の小説は、ミステリーとホラーを少し。ただ新しい小説ですと、ネットワークからデータを引き出すのも有料ですから。両親へお願いするにも気が引けて、本当に少し読むぐらいでしたけど。

ミステリーですと有名なところで海賊探偵ディオ船長の〈島〉シリーズ。人気作家シューブ・クルゴの海洋冒険ミステリー『ディオ船長と浮かぶ流氷島』、『七夢島の切り裂きマー・メイド』、『ゴマダラカ・ミキリムシ島の危機』など。このシリーズは本当に大好きで、新作が出たら教えてもらえるよう、パパとママにお願いしたものです。

それからホラーですと、イサク・ロイモン『黒鉛の爪』。過去に地上の世界を崩壊させた大戦をモデルに、追いつめられた大国がマグラという怪物たちを宇宙から呼び出し、最後には敵味方の区別もなく、人間がマグラたちに喰いつくされるというリアルホラー小説。

怖い話の中では、幽霊やオバケという空想の存在よりも、本当に現実で起きたことのようなリアリティがあって。自分が知らないだけで、こんな怖いことが本当に発生しているのではと錯覚させるようなホラーが好みでした。

そして、小説に夢中な人たちの多くがそうだと思いますけど。わたしも色々な物語を空想して、ぽつぽつと文章を書きつづるようになり。目の見えないわたしがこう思うのは、少し、おかしいかもしれませんけど。大人になったら作家になりたいと、子供心にあこがれを持つようになりました。

＊

その後わたしが大人になる上で、いくつかの転機となったことを書きます。

ひとつは、レイン・マクリール先生との出会い。眼科のお医者さまで、男の人です。わたしの目、じつは見えるようになるのです。

それを知らされたのは、わたしが初潮を向かえたときですから、十三歳の頃でした。こうした女性の生理現象はあまり書くべきではないかもしれませんけれど、わたしにはそれも大人に近づいたというひとつの節目でしたから。

レイン先生のお話によれば、先天性の視覚障害は症状の発覚する幼児期の段階

に治療をはじめ、その後の回復に合わせて医療のサポートを受けるのが通常だそうです。ただわたしのように、本当に生まれてすぐ視力を失い、光も感じられなくなるという症状は希少なのだと。

それを踏まえて、わたしが幼児期から治療を受けてない事情を両親から聞かされました。そのときは両親とリビングのソファーに腰かけ、神妙な空気の流れる中で、パパは事情を知らないわたしに過去のことを話しはじめました。

希少な症例であるわたしの目を治療できる施設が少なかったこと。その治療には多額の費用がかかること。

それに治療しても、通常とおなじように目が見えるという、確実な保証がないこと。見えても視力が弱いまま回復しない、あるいは色が分からないなどの障害が残るかもしれないこと。治療が確実に成功する保証もなく、失敗すれば一生盲目の場合もあること。

説明するパパの声に途中からママの涙声がまじり「ごめんなさい」とママは云いました。そうした事情で、お医者さまから治療を提案されてもはっきりと決断することができなかったと、パパも辛そうな声で云いました。

わたしはショックが大きすぎて、胸に冷たい固まりがつかえたような苦しさを感じ、とても声が出せませんでした。べつに治療のことで両親を責める気持ちはなく、わたしが両親に感謝していることは前に書いたとおりです。

ショックだったのは、わたしが盲目に生まれたことで、それほど両親が心を悩ませていた事実を知らなかったこと。目が見えないことを普通に受け入れ、幸せであるとさえ考えていたこと。

きちんと見える目に生まれていれば、両親が悩むこともなかったのだと。わたしは自分自身の存在を否定したい気持ちでいっぱいでした。

決断はできなくても、お医者さまと相談して準備はしていたのだと、パパは云いました。そして、治療の費用や準備の見込みがつき、最後にわたし自身の意志を確認したいと。

「メリイ、お前も目が見えるようになりたいだろう？」

返事はすぐにできませんでした。もちろん治療したほうがいいことは理解できました。治るなら、わたしも見えるようになりたいと思いました。

けれどその治療で、また両親に負担をかけてしまうこと。確実に治る保証はなく、わたし自身は盲目の生活にそれほど不自由を感じていないこと。

「あなたの好きなようにしていいのよ、メリイ」とママ。

わたし自身が望む以上に両親はわたしの目を治療したいのだと思いました。わたしの目が見えるようになれば、ふたりが喜ぶのだとも感じました。わたし自身の望みでなく、それで両親を幸せにできるなら。ただそれはとても云いづらく、わたしはノドにつかえる言葉をひとつずつ取り出すように告げました。

「わたしも……目が、見える、ように。なりたいです」

両親の顔、わたしの顔、わたしの好きな小説。世界の姿、地上の空。それらを見ることができるなら。

あらためて目が見えることを想像したわたしは、自分が望むことの大きさに気づきました。それはつまり、わたしの世界を一変させることです。

「わがままを云って、ごめんなさい」

色々な感情が次々とあふれて、ぐねぐねと胸の奥でうねり、体が熱くなり、わたしはすすり泣きをはじめました。

お金を使わせて「ごめんなさい」。目が見えなくて「ごめんなさい」。きちんと生まれてこなくて「ごめんなさい」。わたしは下を向いたまま後ろめたさで顔を上げることができず、声の代わりに涙ばかり出て、心の中で謝り続けました。

＊

その後わたしは病院に連れられ、主治医であるレイン先生のところへ何度も通うようことになりました。

治療と云っても、最初は検査ばかりでした。目の検査、角膜の検査、網膜の検査。水晶体の検査、視神経の検査、脳の検査。そうした検査を多くすることで、一番効率がよく成功性が高い治療を考案するのだと教えられました。

それと遺伝子と血液の検査。これは説明を受けても、よく理解できませんでしたけど。視覚障害には遺伝性の原因があるらしく。わたしの両親、あるいは両親の親、そのまた親と受け継がれる遺伝子の中に、視覚障害を引き起こす異常な因子があるかもしれないと。

この場合、わたしの子孫も視覚障害を発症する可能性があるわけです。その異常な因子を正常な因子に取りかえる、遺伝子治療という方法があると。その関係で、ベッドの上で両足を開かされ、卵子を採取する検査も受けました。

中には辛い検査もありました。それでもレイン先生は優しく気さくな人で、なにより「絶対に治るよ」と云ってくださいましたから。「治すよ」ではなく「治るよ」という断定的な言葉の中に、わたしは自信と力強さを感じたのです。

目の見える可能性が生まれたことで、より具体的に未来の希望を持つこともできました。作家になりたいというあこがれのことです。

もし目が見えて大人になれたら、すぐに管理局からＩＤを発行してもらって、ネットワーク内のコミュニティに参加して。作家のサークルに参加して、わたしの小説を公開できたらいいなと。目が見えなくても、やろうと考えていたことですけど。目が見えない今でも、文章を書くことはできますから。

ただ目が見えるようになれば、もっと実現性が確実になります。それはわたし

が自分の生活を文章に書くことをはじめた理由にも、少し関係があります。
目が見えずに生きてきた今の自分を文章に書くことで、もし目の治療が成功しても、目に障害を持って生まれ、盲目の人間として生きた過去の時間と存在を消さないために。たとえそれが普通からすれば、ひどく不幸にしか見えない、暗闇の世界ですごした時間でも。

## 2.

赤誠メリイ、十六歳——

開眼手術を受けてから半月。わたしは病室のベッドに腰かけ、不安と緊張と期待を胸の中で交互に出し入れしながら、レイン先生の言葉を聞いていました。
今日この瞬間に、わたしの顔に巻かれた包帯が取れるのです。

「じゃあ、赤誠さん。ゆっくり目を開けてみようか」
顔から包帯の圧力が消えました。ゆっくり開けるようにと云われて、わたしはできるだけ静かに目を開けました。
「大丈夫かい。病室の中は暗くしてあるけど、目を開けて痛みはないかな？」
ぼんやりと、視界に色と光が見えました。目を開けて瞼を動かしたのは、ほんの一瞬でした。わたしは顔をうつむきかげんにして、下を向いていました。
「鏡が分かるかな、赤誠さん。見てごらん。それが、きみの顔だよ」
わたしは右手に丸い手鏡を持たされていました。見えたのは自分の手と、病院で着せられたパジャマの色でした。
——これが、わたしの顔。
鏡に映る自分の顔を見るのは、妙な気分でした。いえ、目を開けたときから感覚がおかしくて。既視感というのでしょうか。生まれてすぐ、まだ目が見えていたときのことを忘れていても、目が見えるという感覚だけは記憶の底に覚えていて。けれど、目に映るものに現実感がなくて、まるで夢の中にいるような。
目を動かすたびに、ちらちらと鏡に映る顔が動きました。わたしが目を動かすのとおなじタイミングで鏡に映る目が動くことに気づき、それでようやく、わたしはそこに映るものが本当に自分の顔なのだと認識しました。
黒く長い髪、眉毛の上で横一線に切られた前髪、白い顔。ほぼ中央に鼻、口を開くと見える白い歯。じっくり観察しても全部はじめて見るものでしたから。わたしは自分の顔へ、すぐに慣れることができませんでした。
「どうだい、よく見えるかな？」
レイン先生に云われ、まずは目が見えることを伝えるべきだと気づき、わたしは顔を上げました。
「レイン先生……」
けれど、わたしの言葉を続けられませんでした。わたしの前に椅子が置かれ、レイン先生はそこに腰かけていました。ただそこにいるレイン先生は、わたしの想像とはまるでべつの姿でした。鏡に映るわたしの顔と比べても、あまりに違すぎました。男女の違いとか、年齢の違いとか、そうした差ではなく。
レイン先生の顔には、目も鼻も髪の毛もありませんでした。白衣を着た身体の上に乗るのは、黒光りする球形の頭。折れたアンテナのような二本の角が額から突き出し、顔の左右が丸く膨らんでいました。白衣の下には、黒光りする固そうな皮膚。指や手は骨の形そのままで、柔らかな肉感というものがまるでなく、それは、ほそい枝のようでした。
外骨格、キチン質、昆虫の皮膚。読書で仕入れた言葉が、次々と頭に浮かびました。丸い顔の膨らみは昆虫の複眼。昆虫人間。そう、昆虫。実際に昆虫というものを見たことはありませんし、ふれたこともありませんでしたけど。云うなればそれは昆虫の姿をした人間でした。
「どうかな？　赤誠さん」
気さくな声だけは、レイン先生のものでした。けれど、レイン先生のはずがありませんでした。わたしはレイン先生の顔にふれたことがありました。そのときは確かに目や鼻にふれて、そこから普通に男性の顔が想像できました。
「どこか痛むとか、目を開けているのがつらいとか、変なところはないかな？」
——ええ、よく見えます。先生の顔がおかしな風に見えること以外は。
おかしいのは、わたしの目ではないかとも考えました。目の障害や、手術で使用した薬の副作用による幻視。あるいは本当に夢？　それとも。
「レイン先生、パパとママは……」
異常を伝えることもためらわれ、わたしは誤魔化すようにたずねました。病室には両親も来ているはずでした。
見わたせば、うす暗い室内。地下ですから窓はありませんし、まだ照明は暗いままでした。病室も個室でベッドはひとつしかなく、わたし以外の患者さんはいないはずでした。
「おめでとう、メリイ。目が見えるようになったんだな」とパパの声。
けれど、どこにも姿が見えません。
「本当によかったわね、メリイ」
「ママ」
耳の感覚では近くから聞こえるようでも、視線を向けた先に映るのは異形の姿をしたレイン先生だけでした。
「どうかしたかな、赤誠さん」
「あの、いえ……」
レイン先生をまともに見ることができず、顔を下に向けました。右手の鏡をちらりと見れば、やはり映るのは目と鼻のついた自分の顔でした。
「じゃあ、少し部屋を明るくしようか」
レイン先生は椅子から立ち上がり、照明のスイッチがある出入口へ向かいました。その足もとを見れば、鋭い五本の鉤爪が生えた足。
黒い爪床にこすれ、すかすかと擦過音

がしました。そんな足音、レイン先生といたときには聞こえませんでした。耳の感覚までも狂ったのでなければ。

——レイン先生じゃない……。

ふいに室内の照明がまぶしさを増し、わたしは思わず目を閉じました。

そして、目を開けた次の瞬間、わたしは「ああっ」と声を上げ、手にした鏡を放り出しベッドから立ち上がりました。

「パパ、ママっ」

出入口の横に、ふたつの人影がありました。ひとりはズボンとシャツを着た男の人。もうひとりは、スカートをはいた女の人。わたしは瞬間的に、それが両親だと判断しました。

「どうしたんだい、メリイ?」

「どうしたの、メリイ?」

けれど、わたしは近づこうとする足を止めました。パパとママの声は、出入口とはべつの方向から聞こえました。

「どうかしたのかな、赤誠さん」

わたしの前をさえぎるように、レイン先生が立っていました。そして、パパとママの声はレイン先生の位置から聞こえたようでした。

「どうも、勘違いをしたようだね。後ろのこれはただの人形だよ、赤誠さん」

「やめてっ」

レイン先生はふたつの人影に近づき、それぞれの顔に外骨格の手をのばしました。人影は動きませんでした。わたしは思わず声を上げました。

「パパとママというのは、きみを生んだ人間のことだろう? それなら、これはきみの両親ではないよ」

レイン先生がそれぞれの顔を引っ張るように手を動かすと、引きのばされた皮膚から、べりりと音が聞こえました。

「嘘……どう、して」

皮膚を剥がされたそこには、にぶく銀色に輝く金属の顔がありました。複雑にからみ合う金属の筋と、目の位置で発光する小さな光。それはロボット。

わたしは足のちからが抜けたように膝が落ち、その場に座り込みました。嫌な感じがしました。とても嫌な感じが。

「ああ、いい恐怖だね。恐怖にあぶられた脳がこうばしく焦げる匂いだ」

レイン先生は動けないわたしに近づくと、わたしの頭に顔を寄せました。

——恐怖、これが恐怖。今感じているこの嫌な感覚が怖いということ。

髪の匂いをかぐように、わたしの頭へ顔を近づけるレイン先生。昆虫の顔。その下の半分が横に裂け、ぱっくりと開いたそこには大きな空洞がありました。

ふいに読書で得たわたしの知識から、浮かび上がる言葉がありました。複眼を持つ顔、鈎爪の手足、黒光りする硬質の身体、大きく裂けた口。生きた人間を好んで喰らう、恐怖の怪物マグラ——イサク・ロイモン『黒鉛の爪』。

「ああマグ、ラ……」

よだれのような粘液をしたたらせた口の奥からキキィと、錆びた金属がきしむ音が聞こえました。それは硬質な啼き声のようでした。

「そう、いい恐怖だ。もっと激しく感じるんだ。怖くて怖くて、その恐怖で気が狂うぎりぎりのところまで」

「来ないで……助け、てっ」

足が凍りついたように動かず、わたしはおしりを床につけたまま、腕のちからで這うように後ずさりました。

「そんなに嫌がらなくてもいいじゃないか、赤誠さん。ぼくはずっと、きみをそばで見てきた。きみの身体で、ぼくの知らないことはない。きみが病気にならないよう健康にも気をつけてきた。色々なことも教えてあげた」

「どうした、メリイ?」とパパの声。

「どうしたの、メリイ?」とママの声。

わたしに話しかけるのはマグラの顔。両親やレイン先生の声が聞こえるのは、大きな牙の生えた暗い空洞。その後ろには、両親の姿をした人形。

——入れ替わったのはいつから? わたしのそばにいたのは誰?

外骨格の手がわたしの襟首をつかみ、ぶちっとパジャマの布が裂ける音がして胸のボタンが弾けました。乱れた胸もとからこぼれる白い肌。ふれる黒い爪。

——嘘、嘘、嘘、嘘、嘘、嫌、嫌……嫌っ、嫌っ、嫌っ。

「いやぁあああああ——」

＊

目に映るのは、横倒しの世界でした。

まばたき。顔にかかる髪。黒いカーテン越しのような視界から、肌色をした手が見えました。それは自分の手でした。

わたしはベッドの上で、うつぶせに寝ているようでした。簡易的なソファーや手術台という感じのベッドで、サイズは人ひとりがようやく乗れるほど。

なぜここで寝ているのか。ベッドにたどりつくまでの記憶が、ありませんでした。まるで長い夢から覚めたような。目が見えなかった頃のことさえ、夢の中ですごした時間のような。

「あっ、ん、目が……」

わたしは急いでベッドから身体を起こし、片手で髪を直しました。そして、目の前に両手をかざし、手のシワを数えるように、じっと眺めました。

「わたしの名前は、赤誠メリイ」

先天性の視覚障害で、生まれてすぐ視力をなくしたこと。目の治療を受けたこと。目が見えるようになったこと。

記憶が連続性を取り戻し、色々なことが次々と頭に浮かびました。

昆虫のような異形をしたレイン先生。本の中で見た怪物マグラが、目の前で現実に存在したこと。そしてパパとママの姿をした金属製の人形。

異常すぎる光景は現実で起きたことなのか記憶があいまいで、ただ映像だけが頭に残されていました。手の感触だけで思い描いたパパとママの顔も、今では根拠のない想像でしかなく、視覚の映像にかき消されそうで。

目から絶え間なく流れる情報は、それほど強烈でした。色彩、明暗、輪郭。まだ見えるようになってから少しの時間しか経過してないはずなのに。

まるで昔からそうであるように、頭で意識する必要もなく、ただ目を開けているだけで、膨大な情報が頭に刷り込まれていきます。逆に目が見えないときはつねに意識していた耳や肌の感覚が、あまり感じられないようでした。

「ここ、どこなんだろう」

身体を見れば、身につけたパジャマは襟もとが裂け、ボタンがいくつか取れていました。足にはスリッパがなく裸足でした。やはりあれは、全部が現実で起きたことなのでしょうか。

ここが病院であることは確かでした。部屋の作りは、わたしのいた病室とおなじでした。それと部屋の匂いが。鼻を刺す薬品の匂いと、金属の匂い。

部屋には、いくつかの医療機器が置かれていました。おそらく匂いと空気の印象から、わたしが手術や診察を受けた部屋のようでした。

肌寒さはなくても、足を下におろすと床は冷たく、裸足の裏が貼りつくようでした。わたしは出入口を求めて視線をさまよわせ、医療機器のあいだをすり抜けるように奥へ向かいました。

部屋はわたしのいた病室よりも広く、ふたつの部屋をつなげた感じでした。奥に向かうほど置かれた機械が密集し、わたしは肩や腰をひねり、身体をすき間へ合わせるように進みました。

奥には部屋の照明とはべつの光源が見えました。明かりがあるということは、そこに明かりを必要とする人間がいるわけです。病院には、レイン先生以外のお医者さまや看護師さんもいましたから。

行きついた部屋の奥は、うすい壁に隔たれていました。上半分が透明なガラスで、光源は壁の向こうにありました。

それは発光する、いくつもの大きな柱でした。床から天井までとどく、円筒形をした透明なガラスの柱。おなじ形のそれが、いくつも並んでいました。

「これは、何かに使うもの？」

柱の内部は水に満たされ、水槽のようでした。中には気泡がわき、びっしりと黒いものが揺れていました。海底でただよう海草を集めて詰め込めば、おそらくこんな感じだろうと思います。

わたしはもっとよく見ようと、ガラスの壁に手をつき、顔を近づけました。

発光する水の中をただよう黒いもののすき間から、白いものが見えました。柱の天井近くに浮かぶ白い三角の。

「……え、いっ嫌！」

思わず口から、悲鳴のような声がもれました。白い三角のそれは人間の鼻。白い棒のように突き出たのは人間の腕。丸い形をしたのは耳。すき間から見える白い肌、膨らんだ乳房、目、顔の輪郭。

――ああ、ああ。

わたしは思わず目を閉じました。水の中をただよう黒く長いものの正体に気づいたのです。それは柱の中を覆うほどにのびた黒い髪の毛でした。

両目を閉じた闇の中で柱の内部に見えたパーツが組み上げられ、想像の中で女性の裸体が形成され、そして顔には最近どこかで見たパーツが使われ――

はっと目を開けた瞬間、目の前のガラスに映るわたしの顔は、ひどく驚いたように口を半ば開け、目を見開き。

「違う、嫌っ！」

柱の中身から想像したその顔は、ガラスに映るわたしの顔に似ていました。

そのとき奥に並んだ柱の内部で、ひときわ大きな気泡が生じ、弾けた気泡の揺れが密集した髪の毛をかきわけ、目を閉じた少女の顔が見えました。

「違う、これは間違い、違う……」

わたしは顔をそむけ、その場から逃げ出しました。それはただの想像にすぎません。それは柱の中身が全部おなじもので、それが人間で、おなじ女性で、おなじ顔をした少女で、わたしとおなじ。

――ああ、いったい。あれは。わたしは、何者なのでしょうか。

＊

その部屋を出たわたしは、どのようにして病院を出たのか。ふと気づけばシェルターの通路を歩いていました。

「家に……うちに帰らなきゃ」

なにが起きたのか。どうすればいいのか。きちんと理解できることは、なにひとつありませんでした。

ただ足を止めると、なにか嫌なことを考えそうで、なにか怖いものが後ろから追いかけて来そうで。わたしは裸足のまま、通路を歩き続けました。

このまま歩いて家に戻れば、そこには本当のパパとママがいて、わたしのすごした部屋があって。帰ったら書きかけの小説を書いて、目が見えるようになったのだから、もっと他にできることを。

通路は広い道がゆるやかな弧を描きながら、どこまでものびていました。

いつしか肌や顔から汗がふき出し、ときおり目が汗でしみました。それでも涙をこらえて、耐えずに泣き出してしまうと、もう歩けなくなりそうで。

ふと前を見ると、通路の左側に開く穴が見えました。近づくとそれはべつの通路につながる、ほそい穴でした。ずっと上まで続くのぼり階段で、その先は明かりのとどかない闇の中でした。

わたしはふらりと、その階段に足を向けました。闇の中に怖さは感じませんでした。むしろ、どこか安らぐような気持ちがして、それがあてもなく歩き続ける淋しさに勝りました。

目が見えず闇の中ですごした時間の長いわたしは、光よりも闇に親しみを感じるのかもしれません。けれど、それだけではない懐かしさがありました。

「ここ……来たことがあるんだ」

わたしの記憶が確かなら、この階段は

地上の世界へ出るための階段でした。
子供の頃、パパとママに連れられて歩いた階段。片手をつく壁の感触にも、どこか覚えがあるようでした。

＊

金属の扉についた丸いハンドルを回すと固いものが外れる音がして、扉が横にずれました。光がこぼれ、空気が流れ込み、わたしは扉の重量にもどかしさを感じ、出入口のすき間に身体をねじ込むようにして外へ出ました。
扉を抜けると別世界でした。地下では感じることのない風。汗に塗れた肌を冷やす空気。そこにはまぎれもなく、地上の世界がありました。
「あったんだ、本当に」
わたしはふらふらと数歩ふみ出し、足を止め、視線をめぐらせました。
地上は夜でした。はじめてここへ来たときとおなじ夜。なにもない大地がどこまでも広がり、遠くには三角を連ねた山が影のように見えました。
わたしは一瞬だけ目を閉じ、瞼の裏側に映る光を見ました。見上げれば黒い空が広がり、月や星は雲に隠れて見ることはできませんでした。けれど、雲のすき間からもれる明かりは、地下で目にふれた人工的な光よりも、ずっとやさしく感じられました。
「ここだけは、嘘じゃなかった……」
十歳の頃、はじめて連れて来られたときに想像した世界とおなじ景色です。おなじ光と、おなじ風と、おなじ匂い。どこかくさいようで、どこか懐かしいような、吸い込むと濃い味のする空気。
わたしは見上げるのを止め、地面に寝ころがりました。パジャマが汚れるのもかまわず、固い土や石が頭や背中に当たる痛みにもかまわず。あお向けに寝ころがり、顔を夜空に向けました。
両腕を左右に投げ出し、全身で夜空を受け止めるようにして。目を閉じても、それぞれに色の違う星の光は消えることがなく、目を開けても変わることのない景色がありました。見開いた目からあふれ出した水分は行き場をなくし、わずかに涙がこぼれました。
それからしばらく、風がさらに冷たく吹きつけ、空から落ちはじめた水滴が、ぱたぱたと顔に当たりました。肌寒く感じられるほどまで気温が下がり、空から落ちる水滴は数といきおいを増し、大粒のシャワーに変わりました。
雨でした。わたしは身体が濡れるのもかまわず、全身で雨を浴びました。
地面を叩く、やさしい雨音。地面に溶け出した鉄分の生ぐさい匂い。手にふれるのは水に濡れて柔らかさを増す、土。まだ濡れていない髪をさらう風。
わたしの身体が世界に溶けるようでした。両目を閉じていても、闇の中にいても、わたしのすぐそばで全身に感じられる世界が確かにありました。
「雨の日は、お外に出ちゃ駄目って」



わたしは子供の頃に、両親から云われた忠告を思い出し、唇から流れ込む雨のにがい味に舌を刺激され、口もとに笑みを浮べました。
「駄目じゃないか、メリイ」
「パパっ」
すぐそばで聞こえた声に、わたしは反射的に目を開けました。
至近距離に、わたしを見おろす昆虫の顔がありました。瞬時の後悔。わたしは目を開けてしまったのです。
「駄目じゃないか、赤誠さん。せっかくの恐怖を忘れかけちゃ」
とっさに身体を起こそうとするわたしを外骨格の手が押さえつけ、予想以上の重量が身体へのしかかりました。
聞こえる声だけは、まだレイン先生やパパのものでした。けれど、その身体はお医者さまの白衣を脱ぎ捨て、黒光りするキチン質の肌をさらしていました。
「あなた誰なの？」
異形の姿が目の前にあるのは、とても嫌な感じでした。けれど、わたしの身体に直接ふれる異質の感触が、その不快な肌ざわりへの嫌悪感が、恐怖とはべつの強い抵抗を感じさせました。
「本当のパパとママは、どうしたの」
それはおそらく、生まれてはじめて感じるほどの強い怒りでした。
「それは、きみにも分かっているんじゃないか。きみには色々と本を読ませて、きちんと判断のできる知識もあたえてあげたし。きみも、あの部屋を見たんだろう？　きみとおなじ姿をしたものが、水槽の中で育てられているところを」
わたしの脳裏に、あの部屋で見た光景が浮かびました。水に満たされた透明なガラスの中に浮かぶ姿。わたしたち。
「さあ、現実を見て考えるんだ。そのためにあたえた知識で、そのために治療した目だ。赤誠さん、きみはどうやって生まれてきたのかな？」
身体を濡らす雨水の冷たさが、ふいにわたしを襲い、がたがたと凍えるような寒さを感じはじめました。
「きみは餌なんだ。ぼくたちマグラが食べるために作り出したんだ。きみに読ませた本、『黒鉛の爪』。あれはフィクションなくて、ドキュメンタリィだよ。人間の視点で書かれた話だけどね」
――イサク・ロイモン『黒鉛の爪』。
「ぼくたちは腹を空かせていた。そこへ人間たちがディナーに招待してくれたわけさ。ぼくたちの食料が生命体の脳であることは、あれにも書かれていたかな。色々な種族の脳を食いつくしたけどね。ここに来て、ぼくらは極上の味覚を手に入れた。恐怖にあぶられた人間たちの脳だよ。きみたち人間が生で食べていた肉を、偶然から手にした炎で調理して食べることを覚えたようにね」
「そんな嘘、よ……」
わたしは本の内容を頭に思い浮べながら、反論をしようとしました。けれど、うまく頭がまわらず、声にもちからが入

らず、身体が震えはじめました。
「ただ不幸なことに、人間は弱すぎたんだ。ぼくたちが外から持ち込んだ微細な菌やウイルスのせいで、ぼくたちに抵抗したり恐怖を感じたりする前に、ばたばたと死にはじめた。死んだ脳でも腹はふくれるけど、それじゃあ味も糞もない。そこで食べやすい家畜用の人間を作る計画が生まれたわけさ」
マグラは外骨格の手をのばし、わたしの胸もとにふれました。
「止めてよ、嫌……」
ほそい枝のような指がボタンの取れたパジャマのすき間から滑り込み、雨に濡れる素肌にふれました。わたしは地面に押さえつけられながら腕をのばし、その手をつかんで止めようとしました。
「きみたち人間もさあ、病気に強い種をかけ合わせて、新種の野菜や肉を育てるだろう？　味をよくするためにストレスをあたえたり、太らせたりするだろう？
ぼくたちには恐怖こそが、なによりの美味だ。人間に至上の恐怖をあたえるための育て方が必要だったのさ」
いくら引き剥がそうとしても、マグラの手を動かすことはできませんでした。そして氷のような感触をしたマグラの手が、わたしの胸をつかみました。
「痛っ、痛い、嫌っ、痛い！」
一瞬、マグラの手がわたしの乳房を鷲づかみにして、握りつぶしたのです。
「飼いならされた家畜は、飼い主が殺そうとしても恐怖を感じない。きみ自身が家畜であることに気づくことなく、ぼくたちを恐怖の対象としてとらえさせる育て方が必要だった」
マグラがわたしの胸から手をはなしても、ずきずきとした痛みが残り、その痛みは心にも響くようでした。
「どうだい、赤誠さん。怒りは消えたかな？　怖いだろう？　恐ろしいだろう？
きみはこの瞬間のために作られたんだ。視覚に異常を引き起こす因子を遺伝子の中に組み込んでね。ぼくたちの姿を見ることなく、余計な情報をあたえず、都合よく育てやすいように、わざわざ盲目の状態を作り出したのさ」
上下に裂けるマグラの顔が見えました。大きく開けた口の奥から、鋭い杭のようなものがせり出していました。強さを増した雨が冷たくふりそそぎました。目から流れ出した水は、もう涙なのか雨なのか分かりませんでした。
凍えるような寒さにもかかわらず、身体に妙な熱があり、吐き気がして、ひどい気分でした。頭がぼおぉっとして、もう抵抗する気力もありませんでした。
ああ、確かマグラは口の奥からせり出した鋭い突起で人間の頭に穴を開け、そこから脳を食べるのです。
「さて、味見をさせてもらおうか。まっ先に食べることができるのは、開発者の特権だね。そのぶん色々と苦労をさせられたわけだけど」
マグラは口から突き出た突起をそのままにして、さらに上からのしかかり、わたしの左耳に顔を近づけました。その一瞬、マグラの複眼に浮かぶ光が笑うようにかがやきました。
「メリイ。あなたは、なにも心配しなくていいのよ。あなたのサンプルは、もともとたくさん作れるように複製してあるの。もしあなたの脳がまずくても、今度はもっとうまく作れるわ。あなたの目が治る前のことはみんな記録されて、サンプルに移し変えもできるのよ」
「そうだぞ、メリイ。今は食べられることだけを考えればいいんだ。味を調整したら、あとはいつでも食べたいときに目を治せばいいだけさ。お前の量産品があちこちに出まわって、それこそ缶詰の蓋を開けるみたいにな」
気さくなレイン先生の声、やさしいママの声、明るいパパの声。
耳もとでキキィと金属をすり合わせるような音が聞こえました。
そして、耳の穴をふさぐように、突き刺さるものがありました。それがどんどん奥に進む感触がありました。おそらくマグラの口から突き出た、あの鋭い杭のようなものが。痛みと、恐怖。
「嫌、嫌。止めて、嫌ぁ、止めてよ」
ああ、嫌。
嫌、嫌、嫌、ああ。
助けて、助けて。
パパ、ママ。助けて。
誰か、誰か。
もういい。もう止めて。
誰か、誰か。
もういい。
こんな世界、もう止めて。
もう見たいものなんてない。
見えなくていい。返して。
もとに返して。闇の中に。
闇の中に。嫌なものも、余計なものも見ずにすんだ、あの世界に。
誰か、誰か。神さま。
ああ、誰か。
誰か。
誰か、お願いですから。もう。
わたしの目を、潰してください――
了